

本の紹介

『戦争は女の顔をしていない』
(スヴェトラナ・アレクシエーヴィチ [著])
と『国民義勇戦闘隊と学徒隊』
(斉藤利彦 [著])



岩波現代文庫
二〇一六年二月
A6判・五〇六頁
税込定価一五四〇円

松岡 勲

ベラルーシの作家スヴェトラナ・アレクシエーヴィチの『戦争は女の顔をしていない』を紹介する。彼女は二〇一五年にノーベル文学賞を受賞した。

第二次世界大戦中、ドイツのヒトラーに侵略されたソ連は、スターリンの指導下で総力をあげて「大祖国戦争」

を闘った。旧ソ連地域では、独ソ戦が始まった一九四一年六月、国家防衛委員会指令によって女性の戦争動員が可能になり、一〇〇万人近い女性が従軍した。出征時の年齢は一五歳から三〇歳までで、その中心は一〇歳代後半から二〇歳代前半の若い女性だった。先の大戦中、女性が直接戦争に動員された国はソ連だけだった。

この本はソ連軍に従軍した女性たちの姿を五〇〇人を超える証言者の声によって描き出した作品だ。女性たちの配置された戦場は、狙撃兵、飛行士、高射砲兵、機関銃兵、爆撃手、斥候、軍医、看護師、衛生指導員、航空整備士、電話交換手、料理係、洗濯係、理容師などだった。最前線から調理場まで、戦場のあらゆる場所に女性がいた。

「勇気を称える」メダルをもらったのが一九歳。すっかり髪が白くなったのが一九歳。最後の戦いで両肺を撃ち抜かれ二つ目の弾丸が脊椎骨の間を貫通し、私の両肺が麻痺して私は戦死したとみなされたのが一九歳でした。一九歳の時に：(中略)私が家に帰った時、妹が私の戦死を知らせる公報を見せてくれました。私は死んだんだと思われていたんです。(ナチエージダ・ワシーリエヴァ・アニシモワ 機関銃中隊

衛生指導員)

これら女性たちの体験は、どれも悲惨で壮絶だ。よくこれだけの証言を集めたものだと思嘆させられる。岩波現代文庫で五〇〇ページになる大著で、なかなか読み切るのに難航するが、実に読み応えがある。ロシア語の原著が出版されたのは一九八五年で、ソ連共産党の書記長のゴルバチョフがペレストロイカを始めた年に当たる。初版当初はまだ検閲や自己規制で削られた部分があった。アレクシエーヴィチは、これまでの戦争の本は「男の言葉で語られてきた。」「女たちの戦争は知られないままになっていた。」と言う。彼女は「その戦争の物語を書きたい。女たちの戦争の物語を。」と語る。全編を通じて、ソ連軍従軍女性の側から、女性の肉體・感性がいかに戦争にそぐわないものか、女性は内側から戦争を拒否するものを持っているかを彼女らの肉声で記録する。

戦後は産科に助産婦としてつとめました、長くは続きませんでした。血の匂いのアレルギー、身体が受け付けないんです。戦地であまりにたくさん血を見てしまったので、もう我慢できなかつたんです。(中略) 赤い布で上着を縫ったら手に斑点ができ

たんです。水疱が。赤い更紗でも、バラやカーネーションの花でも私の身体は受け付けなかつたんです。赤いものは何でも、血の色のものは…今でも家に赤いものは何もありません。(マリヤ・ヤーコヴレヴナ・エジョワ 衛生輜重)

この本を読み、すごく感心したのは、女性たちの「肉声」のみで構成され、著者自身の言葉が極力省かれていることだ。これはとても真似できるものではない。私は、つい聞き手の主観、考えを強調してしまう。自制しなければと思うが、むずかしい。

アレクシエーヴィチは五部作として、『戦争は女の顔をしていない』『ボタン穴から見た戦争』(一九八五年)『アフガン帰還兵の証言』(一九九一年)『チェルノブイリの祈り』(一九九九年)『セカンドハンドの時代』(二〇一三年)を書き上げている。

『チェルノブイリの祈り』は読んだが、子どもの目から戦争を見た『ボタン穴から見た戦争』(いずれも岩波現代文庫)はまだ読んでいない。読むのにエネルギーがいる本だが、また機会を作って読んでみるつもりだ。最後の作品の『セカンドハンドの時代』は、ソ連崩壊以降、社会主義とは何だったのか、旧ソ連地域における急速な資本

主義化とナショナリズムの台頭は何かを問うた本のような。
だ。(岩波書店) これもぜひ読んでみたいと思う。

日本でも、敗戦が日程に上った頃、日本政府と陸海軍は、軍隊外の国民二八〇〇万人の総動員計画を立て、「国民総武装」を実施した。「義勇兵役法」(一九四五年六月二日公布)が実施され、国民義勇戦闘隊は男子満一五歳から六〇歳、女子満一七歳から四〇歳までの、すべての国民が兵役の対象となり、女子にも兵役を課した。もし戦争が八月一五日以降も続いたら、日本の女性たちも旧ソ連の女性たちと同じような悲惨な目にあつたろう。その視点から『戦争は女の顔をしていない』を見つめ直すと、戦争はより切実でリアルなものと感じられる。

(斉藤利彦著『国民義勇戦闘隊と学徒隊』(朝日新聞出版)参照)

なお、現在のアレクシエーヴィチは、二〇二〇年八月の大統領選に端を発したベラルーシ民主化運動の中心にあり、ルカシェンコ独裁政権に対する女性たち中心の民主化運動の中で闘い、民主化運動弾圧後、ドイツに亡命し活動を続けている。